

ネットワークの出現は、今後のオセアニア社会を考えるうえで非常に重要な視座であることを本書は問題提起として指し示している。評者をふくめ、オセアニアに限らずフィールドから共同体ないしは地域を俯瞰し現代社会を考えようとするうえで、本書は最良の手引きとなるだろう。

引用文献

日本語

- メルッチ, A. 1997. 『現代に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳, 岩波書店.
 ハーバマス, J. 1994. 『公共性の構造転換』 細谷貞雄・山田正行訳, 第二版, 未来社.
 斎藤純一. 2000. 『公共性』 岩波書店.

英語

- LiPuma, E. 1997. The Formation of Nation-states and National Cultures in Oceania. In R. J. Foster ed., *Making Nation; Emergent Identities in Postcolonial Melanesia*. Michigan: The University of Michigan Press, pp. 33-68.
 Needham, R. 1975. Polythetic Classification, *Man* 10: 349-369.

田辺繁治. 『精霊の人類学—北タイにおける共同性のポリティクス』 岩波書店, 2013 年, 270 p.

津村文彦 *

現代日本を代表する文化人類学者が、1985～86 年の調査を軸に 2012 年まで補足した民族誌データに基づいて、1990 年代から 2000

年代初頭にかけて発表された 6 つの論文を改稿し、書き下ろしの序章と終章で包み込んだのが本書である。北タイの精霊信仰をめぐる 30 年来の著者の研究集成でありながら、精霊の力のポリティクスをテーマに各章が戦略的に配置されており、簡潔で鋭利な筆致に乗せられ、読者は田辺人類学の精霊論に瞬時に引き込まれる。2010 年の『「生」の人類学』で示されたイデオロギー効果と新たな共同性についての分析視点を基盤にして、本書では、コン・ムアン社会の精霊儀礼における、権力と儀礼、〈生〉との接合について幅広い領域にわたって議論が展開される。

序章「精霊とは何か」では、従来のタイの精霊研究にみられる象徴論を批判し、モースの「マナ論」を参照して精霊を「実在する力」として論じる立場を提示する。タイの心身観では〈魂と身体の平衡〉が人格の正常な状態とされる。精霊など外来の力が作用すると平衡が破壊され病や苦悩をもたらすが、儀礼を通じて精霊が守護霊に転換されることで健康と幸福が回復される。この精霊の力は、個人を超えたレベルでも作用し、アルチュセールの「イデオロギー一般」のように秩序と権力を正統化して、共同性を作り出すものと位置づけられる。

第 1 部「伝統社会の基層としての精霊」では、伝統的な精霊儀礼が内包するポリティクスを、親族、村コミュニティ、国家の 3 つの守護霊儀礼の検討を通じて明らかにする。1 章「祖霊と女性—ピー・メン儀礼」は、母系親族の祖霊供養儀礼を検討する。コン・ムアンでは、女性は、男性に比べて〈魂—身

* 福井県立大学学術教養センター

体関係〉が不安定とされる一方で、母系親族では女性が中心性をもち、さらに祖霊という道徳的権威に支配される。こうした女性をめぐる拡散し矛盾した語りが、互いに接合するのが精霊儀礼である。動物を供犠することによって、また暴力的な憑依で女性のセクシャリティを否定することによって、精霊のドメスティケートされない力が否定され、超越的存在たる祖霊に転換されて正統的権威として位置づけられる経路が示される。

2 章「供犠と仏教—プーセ・ニャーセ儀礼」では、ムアンの守護霊プーセ・ニャーセの供養儀礼が祖上に上がる。神話では、先住民ルアで食人鬼の男女プーセ・ニャーセは仏陀の説法を受けて仏教に帰依し、チェンマイ王権から水牛供犠を受け守護霊となったと語られる。守護霊への供養は王家の義務とされるが、20 世紀初め以来、儀礼の執行者はチェンマイ南西の村人で、雨乞いや個人の幸福祈願が行なわれる。神話の公的言説と儀礼での非言説的慣行の共存について、守護霊儀礼のなかの水牛供犠と憑依の局面に、精霊の力を転換し道徳的秩序を導くイデオロギー効果を指摘する。仏教的象徴が儀礼に組み込まれることで仏教的道徳を体現する王の権威が承認されるのがこの儀礼のイデオロギー効果である。

チェンマイの政治領域のシンボルであるインタキン（インドラの柱）の儀礼を論じるのが、3 章「先住民の精霊と権力—インタキン儀礼」である。先住民ルア人はインタキンの原初の設置者であり、仏教を通じて文明化されコン・ムアンに従属したという。インタキン儀礼も、コン・ムアンとルアの支配—従属

関係を確認するものとして行なわれてきた。しかし 1960 年代以降は先住民表象が希薄化し、代わりに仏教を通じて行政の権威が誇示されるものとなり、1980 年代以降は観光資源として消費の対象へと変化した。ルアの精霊の力を自らの権力の正当性へと転換する儀礼は、いくつかの意味を失いながらも、そこに新たな共同性を生成しつつあることが示唆される。

第 2 部「新たな共同性を生み出す精霊」では、都市近郊に勃興した霊媒カルトの分析から、自己と他者、世界との関係を変様させて新たな共同性を構築する可能性を描き出す。4 章「精霊儀礼の認知理論」は、バートレットの「スキーマ」理論を手がかりに、精霊儀礼を人間の基本的認知過程として論じる。コン・ムアンの〈人—精霊〉スキーマは、個人の経験のなかで生み出される。儀礼過程はそのスキーマに依拠しながらも、苦悩の解決のためスキーマを変形し安定化させる。儀礼とは「自己と世界の関係性についての想像的、つまり潜在的にイデオロギー的なものを構築するようにデザインされた行為のシステム」(p. 154) と位置づける。

1970 年代以降の職業的霊媒の夢占いを論じた 5 章「霊媒の夢と憑依」では、ベイトソンの〈イメージ・コード〉の概念、精神医学者ビンスワンガーの「現存在分析」という手法を駆使して、夢の語りと憑依における主体の変化に着目する。守護霊の憑依を示す夢を契機に病から離別し、自己と世界の間を安定化させる試み、また憑依のなかで自己の身体を用いて他者へと生成変化して世界を描

き出そうとする試みは、ともに現実への新しい関りを生む。夢と憑依は自己と他者、世界との関係を表現する認知様式で、そこで語られる予兆は自己を新たな共同性へと導くものとなる。

憑依実践における相互行為を詳細に分析したのが6章「霊媒カルトの勃興と新たな共同性」である。近年の霊媒カルトは衰退しつつある精霊儀礼を継承しながらも、新しく個人の欲望実現が多く誓願されている。憑依する精霊も伝統的な守護霊だけでなくバンコク王朝の英雄や異民族の神も新たに含まれる。霊媒とクライアントの会話をみると、霊媒が男性へと「生成変化」し、霊媒とクライアントのあいだでの全人格的な相互行為である情動的コンタクトを通じて、苦悩が受容され解放される様子がみられる。近年では仏教的表象が色濃くなり、仏教の正統性にも支えられつつ、新たな共同性のなかでの救済を目指すのが霊媒カルトである。

終章「精霊の力」では、ドゥルーズとガタリの「生成変化」、ターナーのコムニタスにも似た「情動的コンタクト」の概念を改めて提示して議論を整理しながら、精霊の力に関するなか、クライアントと霊媒の両者が苦悩を解消し、自己の〈生〉を問い直す機会が与えられ、共同性に支えられたネットワークやコミュニティを構築する可能性が示される。

さて、本書の第一の強みは「精霊とは何か」を真正面から論じたところにある。一部の研究を除けば、タイの精霊研究は、精霊を生と死の両義性や象徴システムからの逸脱など記号論的に捉える傾向が強かった。タイに

限らず、90年代以降のいわゆる「宗教のモダニティ論」では、貨幣経済化の急速な進展にともなう社会変化へのリアクションとして宗教や呪術的なものが再興する状況が分析され、多くは呪術や精霊を伝統の表象として位置づけてきた。だがこうした象徴分析では、精霊は常に伝統への回帰志向とされ、現代世界にみられる新たな動きを描き出すことは難しい。また、より重要なことだが、こうした議論の対象は「精霊が表すもの」にほかならず、それでは「精霊とは何か」に到達することはない。

だが筆者は「コン・ムアンの精霊は力であり、力として存在するもの」(p. 6)と精霊を實在論的に位置づける。精霊を實在する力とみなすことで、〈魂—身体〉関係である人格や村コミュニティ、ムアン国家と直接に関係を取りもちながら、その内部に変動をもたらす道筋があとづけられる。たとえば現代の霊媒カルトにみられる苦悩からの解放と新たな共同性の構築を精霊の力の影響として捉えることが可能になる。精霊の力が働きかけることで、人やコミュニティと世界との関係が新たに組み替えられていくという精霊の力のポリティクス、あるいはイデオロギー効果は、本書のすべての章で形を変えながら繰り返し論じられ、精霊をとおして人が自己の〈生〉を問い直し、新たな主体と共同性を生成する様子が明確に提示される。

こうした議論は、アクター・ネットワーク理論やエージェンシー論との親和性が高い。近年の日本の人類学の流行語でもある「エージェンシー」はあまりに乱用され、なにかを

エージェンシーと呼ぶだけで新しい視角を提示したと勘違いしているかのような傾向すらあるが、本書はそうした流行とは一線を画し、「エージェンシー」という語はほとんど用いられない。他者との共同性を生み出し、それを変化させる力をエージェンシーと呼ぶならば、「精霊の力」はエージェンシーにほかならないが、あくまでも精霊を實在論的に論じる立場からか、實在論的な語彙のみを用いて精霊の人間社会との関りを描き出す、そのアプローチから学ぶところは大きい。

人と世界に働きかける「精霊の力」に着目した議論は、北タイのコン・ムアン社会のみならず、より広い文脈で実践宗教研究の地平を切り開くものといえるが、それでも本書によってタイの精霊のすべてが語り尽くされたわけではない。たとえば、なぜこれほどまでタイで精霊が日常性のなかに立ち現れるのかという問いが頭によぎる。本書をたどれば、精霊は〈魂－身体関係〉たる人格を揺るがす存在であり、かつ運命や業よりも予知不能性が高いのが一因として挙げられるだろうが、精霊とは切り離しがたい「恐怖」などの感情にも注目する必要がある。本書の事例の多くは、儀礼のなかに立ち現れる精霊だが、タイの日常にはもっと多くの些細な精霊に関するエピソードがあふれているはずで、そうした経験には常に特別な感情がつきまとう。6章以降で憑依儀礼における「情動的コンタクト」に言及されるが、非儀礼的な場での精霊との邂逅にともなう「情動的コンタクト」については、さらなる事例の積み上げと精緻な分析が求められるであろう。精霊との予期せぬ出

会いは恐れや滑稽さ、ときには感動をもたらすが、これらは日常世界の生々しさに直接関るものであり、精霊研究は、人が生きる実感を獲得するその経路に到達しうるのである。

奥野克巳編著、『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房、2011年、280p.

大石高典*

人間と動物の関係は、人類学にとって古くから新しいテーマである。特定の動物と人間集団との関りは象徴人類学の分野に研究蓄積がある。一方、生態人類学は狩猟採集社会をはじめ、「自然社会」と呼べるような伝統的な環境利用を行なう社会における食物資源としての動物と人間関係を精細に記述してきた。現代社会においては、狂牛病や鳥インフルエンザの問題に代表されるように、世界各地で同時多発的に人と動物の関係が新たな展開を迎えている。わが国では、人と動物の関係を学際・学融合的に研究すべく、生物学、人類学、考古学など専門分野の垣根を越えた試みが相次いで生まれ、最近15年の間に「動物観研究会」や「人間と動物の関係学会」、「生き物文化誌学会」といった新しい学会や研究グループもできている。海外に目を向ければ、欧米の文化人類学では、西欧において二分法的にとらえられてきた自然と社会の接続をめぐる、人間と動物の関係に関する議論が白熱している。そういった状況のなか、本書は現代における人と動物の関係につ

* 京都大学アフリカ地域研究資料センター